臨 床 報 告

弾力纖維性仮性黄色腫の一例

日本医科大学泌尿器科教室 (主任 北川 漢教授)

公立酒田病院皮膚泌尿器科 (医長 寺田弘一博士)

角 谷 広 男

Hiroo Kakutani

緒 言

最近その好発部位に発生し典型的な発疹を有する弾力纖維性仮性黄色腫の一例を経験した。尙本疾患は比較的稀有とされている。本症は臨床上黄色腫と酷似し、1884 年 Balzer は組織学的に弾力線維に変化を認

め黄色腫の一異型と考え Xanthoma elasticum として報告した。次で 1896 年 Darier は組織学的に黄色腫細胞を欠く事より Pseudo-xanthoma と命名した。私は過去 10 年間の本邦文献 11 例を集め (表 1) 文献的考察を併せて報告する。

表 1 報 告 症 例

症 例	報 告 書	年 令	性	罹 患 部 位	遺 伝	自覚症状	眼 底 変 化
1	山 城	9才	♂	左肩胛部	—	—	—
2	鳥山・三浦	63	♀	頬	—	—	—
3	石 山	54	♂	鎖骨下窩, 前頸下部 腋窩, 上腹部, 鼠蹊部	—	—	両眼霧視 網膜色素線条
4	増 田	47	♀	頸部, 胸部, 腋窩, 腹部, 鼠蹊部, 肘窩,	— (妹 1 人)	—	網膜萎縮 色素線条
5	"	37	♀	眼瞼, 前頸部, 肘窩,	— (姉 1 人)	—	同上
6	松 田	55	♂	頸部, 腋窩, 腹部,	—	—	網膜色素変性
7	赤 木	40	♀	頂部, 頸部, 腋窩,	—	搔痒(軽度)	—
8	"	48	♀	頂部, 腋窩, 鼠蹊部	—	—	—
9	"	38	♂	眼瞼	—	—	—
10	"	25	♂	頂部, 腋窩, 腹部, 肘窩	—	—	—
11	角 谷	23	♀	頸部, 胸部, 腋窩, 鼠蹊部	—	搔痒(軽度)	網膜萎縮 右眼底小出血

症 例

患者: 23 歳, 初診昭和 29 年 8 月 18 日
家族歴: 家族に同様の疾患を証明せず。

既往歴: 特記すべきものはない。

現病歴: 物心つく頃より頸部, 胸部, 両側腋窩, 両側鼠蹊部に黄斑があり, 時々搔痒感があつた。昭和 29 年 8 月 18 日本院を訪れた。

初診時所見: 上述の如く頸部胸部腋窩鼠蹊部等に左右対称性に集簇密生し, 黄色粟粒大乃至帽針頭大の皮膚より稍々隆起せる円斑様萎縮様の発疹があり, 触診にて粗雑な感あり。眼底には網膜に色素線条はないが

萎縮を認め, 又右眼底には小出血があつた。

諸検査成績: 視力は右 0.7(0.9×+0.50), 左 1.0, 血沈値: 30 分 5 耗, 1 時間 16 耗, 2 時間 29 耗, 24 時間 103 耗, 血圧: 106~52, 血液所見: 赤血球 443 万, 血色素 72.0% (ザーリー氏法) 白血球 5700, 百分率は分葉核 52.8% 桿状核 10.4% 淋巴球 (小) 24.8% (大) 4.8%, 好酸球 4.0%, 大単核球 3.2%, 血清梅毒反応: ワッセルマン反応村田沈降反応共に陰性, 尿所見: 蛋白ウロビリノーゲン糖何れも陰性。

組織学的所見: 表皮は幾分角化し, 真皮は弾力線維の増加及び塊状形成が著しい。表皮の基底層に著変な

第 1 図

第 2 図

し。真皮の毛細血管には内皮細胞が腫大し、血管周囲に小円形細胞の浸潤が軽度に見られる。(第3図)毛根汗腺等附属器には著変なし。弾力線維染色では明らかにエラストーシスを認め得る。此の所見より本症は

第 3 図

第 4 図

弾力繊維性仮性黄色腫と診断した。(第4図)

本例には長期間に亘つて砒素剤の(Arsozon)注射を試みたが効果は得られなかった。

文 献 的 考 察

I 原因：原因不明，大人よりも小児に多く現われ，極めて徐々に蔓延して長年月存在すると云われている。

II 本症発生と年齢別及び性別(表2)

本症のは自覚症状のないため比較的年をとってから発見される事が多い。性別には関係がない。

III 罹患部位(表3)

表 2 年齢別及び性別

年齢	性		計
	♂	♀	
～5才			
6～10	1		1
11～20			
21～30	1	1	2
31～40	1	2	3
41～50		2	2
51～60	2		2
61～70		1	1
71～			
計	5	6	11

表 3 罹患部位

部	位	症例数
頂	部	3
頸	部	6
胸	部	3
腋	窩	7
腹	部	5
鼠	蹊	3
肘	窩	3
眼	瞼	1
頬		1
背	部	1

本症は一個所に限局されて来る事は少い。好

発部位としては胸腹部腋窩鼠蹊部肘窩膝窩に多く、その他顔面頸部にも来り、屢々対称的に発生する。吾々が調査した例でも限局して来たものは顔面脊部に発生した 3 例であり他はすべて数ヶ所に発生した。

IV 遺伝及び眼底変化 (表 1)

遺伝的關係の証明されたもの 1 例。眼底変化のあるもの 5 例であつた。尙本症に於て屢々眼底に網膜色素線条の合併を見る事は 1889 年 Doyue 氏により始めて記載された。

結 語

1. 本例は 23 歳女子にて定型的皮疹を主訴として来院した。その発現部位は頸部胸部両側腋窩及び両側鼠蹊部であつた。

2. 診断は病巣部の組織学的所見に於て特有な真皮の弾力線維の変化を認めた事に基いた。

3. 治療法としては砒素剤 (Arsozon) の注射のみを長期間行つて見たが無効であつた。

4. 本邦に於ける過去 10 年間の紙上発表 11 例を集め、年齢性罹患部位遺伝關係及び眼底変化の合併病に就いて検討した。

参 考 文 献

- 1) 五十嵐等：現代医学大辞典 16, (皮膚科学篇) 209 (昭 4)
- 2) 烏山・三浦：臨床皮膚泌尿器科 5, (10), 489 (昭 26)
- 3) 山城：日本外科学誌 51 回 (2), 113 (昭 25)
- 4) 石山：岐阜医報 4 号 43 (昭 25)
- 5) 増田：信州医学誌 1, (2~3) 180 (昭 27)
- 6) 松田：日本眼科紀要 3, (9), 388 (昭 27)
- 7) 赤木：皮膚性病科誌 63, (3), 162 (昭 28)

外陰癌術後全身転移を起した剖検例, 殊に広汎性皮膚転移に就て

日本医科大学第 1 医院産婦人科教室 (主任 石川正臣教授)

松 村 晋
Susumu Matsumura

日本医科大学病理学教室 (主任 木村哲二教授)

渡 辺 日 章
Tokinori Watanabe

緒 言

女性外陰癌は外陰部に発生する悪性腫瘍 (癌腫, Paget 氏病, Bowen 氏病, 肉腫, Peritheliom, 副腎腫, 絨毛上皮腫等) 中の主なものであるが女性性器癌中、卵管癌、陰癌に次で稀に見るものとされている。そしてその約半数にリンパ腺転移を認めるが遠隔転移を起すことは極めて稀である。又、一般に癌腫の皮膚転移の報告例は余り少ないが、その内から私共は 10 箇以上又は多数と記載のあるものを広汎性皮膚転移の報告例として集めその原発癌の発生頻度を見ると大体夫々の癌発生頻度に準じている。併し私等の得た広汎性皮膚転移例が胃癌で 45 例に過ぎず、胃癌の発生頻度に比し極めて少数である。殊に外陰癌の皮膚転移例は 3 例で内 Chrischolt¹⁾ の 1 例のみ広汎性皮膚転移を来していた。私等は外陰癌手術後に全身転移を起し、殊

に広汎性の皮膚転移を起した 1 例を経験し、且つその転移巣に病理組織学的に興味ある知見を得たので茲に報告する。

症例：患者 [] , 53 歳 8 カ月, 6 回経産婦, 家族歴：兄は肺の悪性腫瘍 (病名不詳) で死亡, 父方の甥が昭和 24 年右頸部の肉腫と言われレ線照射により腫瘍縮少し現在未だ再発の徴候を見ないと言う。その他に悪性腫瘍は見当らない。既往歴：16 歳で乾性肋膜炎に罹つた他は著患を知らず。初経は 17 歳 5 カ月, 爾来 30 日型で整調, 48 歳で閉経。18 歳 9 カ月で結婚し, 初産 20 歳 1 カ月より終産 45 歳 3 カ月までに 6 回正常分娩をしている。

現症歴：昭和 24 年 6 月中旬に左小陰唇内面から僅かの出血あり, その部に小さな潰瘍があるのに気付いたが疼痛なく, 時々小出血あり徐々に潰瘍が大きくな